

## ふるさと農村活性化フォーラム ふりかえりミーティング

平成26年10月12日（日） 午後3時～5時 民宿ばんが家（宮古島市城辺）

参加者 11名（敬称略）：

津川尚美、三村晴美、大宮慶子、和崎京子、和崎宏（ひよこむSNS）

小嶋妃佐子、高嶋貞夫（山武SNS）

坪田知己（内閣府・地域活性化伝道師）

平山茂治（宮古島市生活環境部まちづくり振興班）

久保田剛、宮里政史、岡本光代、吉野ゆかり（沖縄県地域・離島課）

池間早苗（沖縄県宮古農林水産振興センター）

要旨（主な発言）：

三村： 初めて沖縄県に、宮古島に来て、人に触れ、みんなが見守ってくれている感じがした。来年も来たい。

高嶋： 沖縄の中でも、宮古島は初めて。台風に当たってしまい残念。

大宮： 民泊はとても良かった。兵庫県の地域活動に活かしていきたい。

津川： フォーラム交流会で「大切なふるさと」を歌った。「宮古の人はシャイ」と聞いていたが、みんなにこにこして聞いてくれていた。

坪田： 人間関係のインターフェイスが低いと感じた。昔からの知り合いみたい。何故こんなに低いのか、2、3回来てみないと分からない。

津川： 大人の修学旅行として民泊体験も良いと思うが、一人一部屋が良い。みゃーくふつ（宮古方言）や料理体験、クイチャー（宮古島の伝統的な円陣舞踊）体験がよい。

久保田： 先日東京で離島移住フェアを行った。なりやまあやぐまつりは体験・交流の機会としてとても重要。

坪田： 移住体験というのは、受入施設が必要。一週間くらい滞在しないと分からない。

久保田： 沖縄県はリゾート、楽園のようなイメージが先行している。ショートステイやコンシェルジュが大事。

坪田：フォーラムで紹介した島根県の海士町はIターンを歓迎している。2,500名の島民の1割を占めている。みんなが受け入れるから回っていく。

久保田：雇用も問題だ。かみやま町では、手に職を持った人に移住を奨励している。

坪田：海士町では雇用を創出した。特産品作り。干しアワビなど。単なる移住ではなく仕事を作りに来る人が多い。

小島：現場に行かないと何でもわからない。

平山：ビジネスを作るという点にとっても興味を持つ。

和崎宏：地域づくり応援員（地域・離島課所属）の意見感想を聞いてみましょう。

吉野：東京都出身です。田舎は所得が低いのに子育てがしやすい。都会では一人が限界と思う。そこがめぐまれている。ただし、文化の違いがあるので、個人的には永住にはまだ踏み切れていない。

岡本：宮崎県出身です。沖縄県に住むのは2度目。地域コーディネーターをしていた。自治会長とよく議論をしてきた。へんくつな方ほど、一度わかり合えたら協力してくれる感じがする。

坪田：海士町の話に戻るが、高齢化、人口減、地域存続の危機感について。海士町では住民が危機感を共有できた。それを受けて町長は「自分が責任を取るから」という姿勢で活性化の取組を促した。宮古島市ではどうですか。

平山：人が減っていくとどうなるか、市民に危機感はまだない。人口が5万人を切ったら交付金が入らなくなるのに。進学や就職で自分の子どもが島を離れるときに戻ってこいとは言わない。市としても市民に意識共有を促していない。

坪田：壱岐島には「イキモノ屋」という海産物の卸売りをする店を作り、芦屋にアンテナショップを出した。ブロードキャストではなく、信頼と共感が得られる方法が、現代ではより受け入れられる。期待を裏切らないこと。

和崎：「決済」という言葉には「縁を切る」という意味がある。お金だけじゃない、沖縄県の「モヤイ」とか、縁が支えるやりとり、支え合い、互酬性が今後より重要になってくるだろう。